漢法苞徳塾資料	№. 229
区分	診察論・脈診
タイトル	**難経脈論の諸項目の難の表**
著者	八木素萌
作成日	1993.07.25　（難経講義）

◎脈を論じる難

１、２、３、４、５、６、７、８、９、10、11、12、13、14、15、16、17、18、19、20、21、23、30、32、35、37、49、58、59、61、81、以上の各難。

部位配当	１、２、４、５、６、14、18、19
脈状	３、４、６、７、９、10、11、12、13、14、15、17、18、19、20、49、58
脈による診断	１、２、３、４、５、６、７、９、10、11、13、14、15、16、17、18、19、20、21、37、46、48、49、58、81
脈診技法	１、２、３、４、５、６、14、18、19、21、61、20
その他	７、８、11、12、13、14、17、18、19、21、23、30、32、35、37、46、48、59、61、81

◎脈部について記述する難

１難　脈診部としての寸口の意味、また、12 経脈に各々脈の拍動部があって、それぞれの経の消息が候えることも記述。

２難　寸部―陽の所治、関より魚際に至る、寸内九分。
尺部―陰の所治、関より尺に至る、尺内１寸。

４難　呼は心と肺に出、浮は陽、心と肺はともに浮、心の脈状は浮大而散、肺の脈状は浮而短濇。沈は陰、腎と肝はともに陰、吸は腎と肝に入、肝の脈状は牢而長、腎の脈状は按之濡・挙指来実。呼吸の間に脾は穀味を受ける、その脈在中、脾は中州

５難　３菽＝肺、６菽＝心、９菽＝脾、12 菽＝肝、至骨＝腎(註…15 菽に相当する）
～脈の按圧の軽重

６難　浮べて損小で、沈めて実大の脈は陰盛陽虚、沈めて損小で、浮にして実大の脈は陽盛陰虚、というように浮と沈の位置で、陰と陽を診ている。２難と４難の記述を受けて、さらに明確にする。

１４難　後段において、「…前大後小　即頭痛目眩　前小後大　即胸満短気……沈細夜加　浮大昼加…沈細夜死　浮大昼死…」また「…上部有脈　下部無脈　其人当吐　不吐者死　上部無脈　下部有脈　雖困無能為害…」のように、前部（寸部）が陽、浮が陽、後部（尺部）は陰、沈では陰、であることを間接的に記述。

１８難　上段は三陰三陽を寸関尺の三部左右へ配当している有名な箇所、中段では「…上部法天主胸以上至頭之有疾也　中部法人　主膈以下至臍之有疾也　下部法地　主臍以下至足之有疾也…」と寸関尺に配当する。後段では「…診不得肺脈　而右脇有積気者　何也　然肺脈雖不見　右手脈当沈伏…左右表裏　法皆如此…」のように脈の在るところに病があること、左右と表裏のように位置を示唆している。

１９難　「…男脈在関上　女脈在関下…男得女脈　為不足　病在内　…女得男脈　為大過　病在四肢　左得之病在左　右得之病在右…」という。脈の左右や上下と病の所在の判定について記述。

◎脈状を記述する難

３難　脈の大過と不及、関格、陰乗と陽乗、復と溢、真臓の脈。また、寸は当見９分で浮―陽、尺は当見１尺で沈―陰についても記述。間接的ではあるが脈長の大過と不及である点も言う。

４難　浮脈と沈脈と呼吸間の脈の意味、五蔵の脈状、

陽脈の脈状；浮・滑・長
陰脈の脈状；沈・短・濇
陰脈状と陽脈状とが混合して現われる場合；
１陰１陽＝沈．滑
１陰２陽＝沈．滑．長
１陰３陽＝浮．滑．長．時一沈
１陽１陰＝浮．濇
１陽２陰＝長．沈．濇
１陽３陰＝沈．濇．短．時一浮

この難の記述で大いに問題な所は「…各以其経所在　名病逆順也」という記述である。ここでの「経」が「経絡」の意味であるならば、各経毎にその経絡の平常な脈状が明らかにされて居ることが必要である。また「つね」〈経常〉の意味であるなら、五臓の平常な脈について記述したうえでなければならない。然し、此処での記述はそのどちらでも無い。また、各々の経脈に脈拍が拍動している部位（ツボ）《１難》があって、其処での脈診によって、その「経絡の消息」を候がう、という診察法があるので其のことを指しているという解釈も成立する。若し経脈別のそれぞれの部位毎に脈診して、その判断に

よって「名病逆順」ならば、「１難」の「…独取寸口以決五臓六腑　死生吉凶之法…」と言うように、『難経』の「寸口脈法」の提唱とは、論理的に撞着したことになるのである。「みち」〈経路〉の意味や「たどる」〈経過〉などの意味と、「つね」の意味とがオーバーラップして用いられている含蓄の深い用語法であると言う解釈もある。何れにせよ此処の記述は唐突な感は免れない。衍文の可能性が非常に高い。

６難　陰盛陽虚　陽盛陰虚の脈状を記述。同時に技法にも及んでいる。

７難　一年（六甲子あまり＝３６０日余）の気候の変化を三陰三陽の六経（六甲子）として、自然での陰と陽との度合いの変化の経過について命名して、各甲子の脈状を表現して、それは「季節の旺脈」であると言う。

厥陰の脈状が「沈短而敦」であると言う脈状について、在来の解釈は「敦」の部分を「どっしりした」「大きい」「しっかりした」などの語義に従うものが基本的であった、これでは季節の「陰が最も盛んな」或は「陰の時期の最終の季節」の脈状が「どっしり」「大きい」「しっかり」のような陽性を帯びていると言うことになる、これは事実と異なる。また、『傷寒論』の「厥陰脈」の記述に矛盾することになる。岩井佑泉氏の字句校勘の仕事によって「頽廃した」の「頽」と同じ意味もあり、音も同様に「タイ」がある事が指摘された。これに従えば『傷寒論』の「厥陰脈」の記述と全く矛盾しないし、事実とも符合する。

９難　数脈は熱であり腑である、遅脈は寒であり臓である。脈状の指示している所を挙げている。

１０難　五臓とそれに配されている腑について、「一脈十変」を論じる。具体的な臓脈を描き出すのでは無い、「急・大・緩・濇・沈」の五種類の脈が「微」と「甚」に変化する場合を「五邪剛柔相逢」の内容の判断として、脈の変化が「甚」であれば「臓」邪が、「微」の場合には「腑」邪が、などのように邪がそこに在る状態であること示していると、判断できる事について記述している。

この『難』には、３つの分かり憎い問題がある。

（あ）「陰陽剛柔」の「陰」とは、臓や陰邪のことで柔、「陽」とは、腑や陽邪のことで剛、と見ているか？とも思える。その点、『九難』の「数者腑・熱、諸陽為熱」「遅者臓・寒、諸陰為寒」と言う記述、『四難』の「浮者陽也」「沈者陰也」という記述などを考慮すると、「臓邪が臓を冒した場合」は「剛」として脈は「甚」になる、「腑邪が腑を冒した場合」は「柔」として脈状は「微」になる、こう言っているように見える記述である。陽邪の病は腑の病症であれば、脈は陽脈〈『四難』では「浮・滑・長」の脈状〉となり、陰邪の病では脈も陰脈〈『四難』では「沈・短・濇」の脈状〉となる。そこで、「腑病」の脈は「微」に現われ「臓病」の脈は「甚」に表現されると言うように聞こえるので、益々判らない。

（い）臓は陰であるから「臓邪」もまた「陰」であろう、腑は陽であるから「腑邪」もまた「陽」であろう。『滑寿』の『難経本義』の註のように「五邪者　謂五臓五腑之気　失其正而為邪者也　剛柔者　陽為剛　陰為柔也　剛柔相逢　謂臓逢臓　腑逢腑也　五臓五腑　各有五邪　以脈之来甚者属臓　微者属腑…」と言うのは『難経』の註と言う枠組みをはみ出していて「不適当」と思われる。『五十難』の「虚邪・実邪・賊邪・微邪・正邪」という「五邪」がある。『十難』の記述は「五臓の邪」を挙げていると言える。
『滑寿』のように解釈すれば、この『難』は、まるで「内傷」病の記述と見ているのかなと思わせる。『四十九難』との関係が問題になる。

加藤章の『難経古義』のように「急・大・緩・濇・沈」の五脈が「微」「甚」の二様に変化することを言うのであり、一つの臓に「急・大・緩・濇・沈」の五脈があり、それぞれが「微・甚」になるので「一脈十変」なのだ、と言うように解釈する方が明快である。

疑問は「急・大・緩・濇・沈」の五脈を指して「五邪」としているか、五臓に邪となる変化を「五邪」としておるか、「正邪・虚邪・実邪・賊邪・微邪」を指しているか、これらの全てをオーバーラップさせて表現しているのか？と言うところである。

（う）病には『滑寿』註のような側面もあるのである、何れの臓の障害であっても、その影響が他の臓腑に及んで行くのである。この点を記述した『難』なのか？それとも、『四十九難』が記述している外因の五行と、五行的に等質の五臓の反応を通じて、病因が現象されるのを記述しているのか？

上の（あ）（い）（う）の何れの場合にも明解では無くて、靄の向こうを透かして視ているようなアイマイさである。『難経』の記述としては、やや趣を異にしている。

１１難　「…人吸者随陰入　呼者因陽出…」を明らかにして「五十動一止」は「今吸不能至腎至肝而還　故知一臓無気者　腎気先尽也」と明らかにして「停滞＝結滞」する「代脈」の病理的な意味を明かしている。

１２難　「…陽絶補陰　陰絶補陽…如此死者　医殺之耳」と誤治を厳しく戒ましめているが、「脈の内絶や外絶」の状態を記述する。「内絶」は「腎肝気已絶於内也」「外絶」は「心肺脈已絶於外也」と示している。この論は、李東垣の『脾胃論』や『内外傷辨惑論』の「体虚は気血の虚であるから心肺の虚に他ならず」「外感は筋骨を障害するから肝腎の病に他ならない」とする思想に継承されている。

張景岳は「脈口浮虚　按之則無　是謂内絶不至　陰気之虚也　脈口沈微軽取則無　是謂外絶不至　陽気虚也」と言うことを『難経譯釋』は引用している。

１３難　もともと色と脈と尺皮の相関と、声・色・臭・味・液などの五臓の表象するものも、また相関しているものである事を指摘した上、それらの間に矛盾が生じている状態が病であること、その矛盾している態様によって、病の予後が判断できることを、論じている『難』である。

この『難』に記述されている脈は、

心～浮大而散
肺～浮濇而短
脾～中緩而大
肝～弦而急
腎～沈濡而滑

と表現されている。

声・色・臭・味・液などの五臓の表象に対して、脈状や尺皮の状況などが矛盾しているのが病である。その矛盾が相生関係にあれば予後良好と判断し、相剋関系を示していれば予後は困難であるか不良かである、と把えている。この場合、五臓の表象を、色に代表させている。

腎の脈は「沈濡而滑」、尺皮は「滑」と表現している。この両者の「滑」を、どういう具合に具体的にイメージするか、これが問題であろう。

１４難　第一段は、脈の数遅の程度によって、病の軽重の程度を知ること、を記述する。「…至脈従下上・損脈従上下…」は重要な指摘であろう。

これは、第二段で、五臓の虚損の基本病証を記述したのちに、「…従上下者・骨痿不能起于床者死・従下上者・皮聚而毛落者死…」と説明される。そして、五臓それぞれについて「治損之法」が述べられる。

第三段では、「不大不小曰平」「為適得病」の脈を述べて、後に「前大後小」「前小後大」「洪大」「沈細」「滑」「濇」「浮大」「不大不小」「有大小」などの脈状が示している病理的な状態について、脈の数遅の程度、およびこれらの脈状が所在している脈部など、これらとの関連において、病が判断できることを記述している。

第四段では、「上部有脈・下部無脈」「上部無脈・下部有脈」の意味する所を記述する、此処は『12 難』の記述と対応している。李東垣が『蘭室秘蔵』酒客病論の中の「瓜蔕散」の項で「…何謂下部無脈・此謂木郁也・飲食過飽・填塞胸中…」と書いているが、これは注目に価する。

１５難　上段では、四季の脈状と、その脈状は五臓の脈でもあること、これを押えた論を展開する、中段においては、脈に変異が見られるのは「胃の気」の不足＝病―大過と不及であり、大過は「病在外」・不及は「病在内」を示している。また、「胃の気」の絶（「無胃気」）＝死である事を記述する。「胃の気」の脈や「脾」の脈は「四時之変病・死生之要会」（胃）「平和不可得見」（脾）であると論じて、上段の記述に対応させている。

注目したい点は、平脈については四季の脈それぞれに異なった表現であるが、しかし、「不及脈」の記述は全て「気来虚微」と述べるのみで抽象的あるのに、「大過脈」と「無胃脈」では、脈状のイメージが明解になる表現をしている事であり、論の裏に、著者の疾病論が隠れているように思われる事である。

１７難　脈診によって病の死生や予後が明らかになる事を、具体的な病症五種を例に挙げて論じる。病症に順な脈は治るものであり、逆な脈は死への転帰を執るのである。病症に対して脈状が順であるか逆であるかに関しては、説明されない、読者の判断が求められている。

１８難　三段に分けて解すべきものと思う。

初段では脈部での三陰三陽の配当を論じるが、この配当の解釈に関しては非常に異説が多い。

二段では「三部者　寸関尺也　九候者　浮中沈也」について、三部に配される「寸関尺」は、身体の上中下となる点を示す、この三部配当は後代の「温病論の三焦論」にまで繋っているように見える。

三段では、積聚と痼疾の判断と脈状について論じている。

１９難　男は「陽」性であり女は「陰」性であって、その故に、男の脈は関上にあり、女の脈は関下にある事、この「尺脈恒弱」（男）・「尺脈恒盛」（女）に脈が反しているのは病である。男が「女脈」をしていれば、「不足」の脈なので「病在内」を意味し、女が「男脈」をしていれば、「大過」の脈なので「病在外」を示している。

そのような異常な脈が、左に見られれば病が左にある事、また「大過脈」の病は「在四肢」を示すとも記述している。「関上」－陽の部・「関下」―陰の部と言う考えは、２難の記述・４難の記述・６難の記述・や、14 難の終段の記述や・20 難の記述などと呼応している。

男（陽体）の脈	女（陰体）の脈
関上に在り（陽部）	関下に在り（陰部）
女脈になっている場合＝不及 ＝病在内	男脈になっている場合＝大過 ＝病在外 ＝病在四肢

２０難　脈部の陽部（関上また寸）や陰部（関下また尺）に脈が見られるが、部の陰陽には脈状の陰陽が対応するものであるから、「陰乗陽」「陽乗陰」の脈とそれが意味する病を記述している。３難、４難、６難、８難、12 難、14 難などが関連深い。

４９難　　色は肝、臭いは心、味は脾、声は肺、液は腎の主りである事から、

A：色の変化（肝主色であるから）は、変化している色が指示している臓に（木邪）＝風＝肝邪が入ったことを意味しており（肝＝青～木邪つまり風邪が肝に入った・心＝赤～風邪が心に入った・脾＝黄～風邪が土〈脾〉に入った・肺＝白～風邪が肺に入った・腎＝黒～風邪が腎に入った）

B：火邪が冒すと臭いを悪（にく）むようになる（臭いは心の主りであり、五行的には熱・火である）。（肝＝臊臭～火邪が肝に入った・心＝焦臭～火邪が心に入った・脾＝香臭～火邪が脾に入った・肺＝腥臭～火邪が肺に入った・腎＝腐臭～火邪が腎に入った）

C：味の好みに変化が出るのは「土邪〈飲食、労倦、湿〉」に冒される時であり、臓の味を喜ぶようになる。（肝＝酸味～土邪〈飲食・労倦・湿〉が肝に入った・心＝苦味～土邪〈飲食・労倦・湿〉に心が冒された・脾＝甘味～土邪〈飲食・労倦・湿〉に脾が冒された・肺＝辛味～土邪〈飲食・労倦・湿〉に入られた・腎＝咸〈鹹・塩からい〉味～土邪〈飲食・労倦・湿〉に腎が冒された）

D：声や発語に変化が現われるのは「金邪〈傷寒・上空から入る冷え・乾燥した寒さ〉」に冒されたのである。（肝＝呼〈怒声・命令調〉～金邪に肝が冒された・心＝言〈譫言妄語〉～金邪に心が冒された・脾＝歌～金邪に脾が入られた・肺＝哭～金邪に肺が冒された・腎＝呻～金邪に腎が冒された）

E：腎は湿〈下から身体を冒す寒冷涼なつめたさの邪＝水邪〉を主る臓であるので、〈下から身体を冒す寒冷涼［氷冷］なつめたさの邪〉に冒されると、臓の液に変調が出る。（肝＝泣〈＝涙〉～水邪に肝が冒されると涙が出・心＝汗～水邪が心を冒すと汗かきになる・脾＝涎～脾に水邪が入ると涎が出る・肺＝涕～水邪が肺を冒せば涕がでる・腎＝唾～水邪が腎を冒せば唾が多くなる）等々と病因診断上に重要な事を記述しているが、脈状からも判断できることを具体的に記述している。それは、病因の性質を意味している五行に同じ五行的な意味合いの臓の脈象が、冒されている臓の脈象と並行して現われる、と言うことである〈例～風邪は木性の邪であるので、木性の臓の肝の脈象として現象する、従って、心が風邪に冒されると、心の火性の脈＝浮大または洪と、木性の臓＝肝の脈つまり弦と、この両者の脈象が並行してでる〉。病症もまた並行して現象することが述べられている。

（別表を参照して頂きたい）

５８難　有名な広義の傷寒の脈と、治療原理と、寒熱病の三種類（皮寒熱・肌寒熱・骨寒熱）が記述されている。

中風：陽浮滑・陰濡弱
湿温：陽浮弱・陰小急
傷寒：陰陽ともに盛而緊濇
熱病：陰陽ともに浮・浮之而滑・沈之散濇
温病の脈：行在諸経・不知何経之動也・各随其経所在而取之。

とある。温病のみは脈象を記入していない。後代に温病学が成立してから、此処の意味が具体的に論じられたので、その解釈に従いたい。

難経脈論の諸項目の難の表―２

1994.03.10（難経講義）　八木 素萌

◎脈による診断に関して記述する難

１難　寸口脈診によって「五臓六腑の死生吉凶」を判断する事が出来るのは、寸口の部は「五臓六腑之所終始」だからであると、主張している。

２難　まず「脈有尺寸」と述べている。寸とは関前の「寸内９分」にある「陽之所治」であり、尺とは関后（関従至尺是尺内）の一寸（分尺為寸）にあって「陰之所治」と言って、脈診部に陰陽の部位的な意味合いを明らかにする。言換えれば脈診部位の生理病理的な意味を記述している。

３難　前の難を受けて４難とともに陰と陽を一層明らかにし、さらに、脈の大過不及とその程度と、それらの意味を論じている。

覆溢、陰乗・陽乗、関・格、真臓之脈などは、正常な脈部を「超過して拍動している＝大過」の脈と、正常な脈部に「及ばない拍動」状態、つまり、俗に言換えれば「脈の長さ」が、脈部を超過しているか、及んでいないかと言うこと、こういう問題の「程度の相違」が帯びている生理的・病理的な意味合いの違いによって脈状の名称を変えている事が理解できるのである。 末尾の「各以其経所在　名病逆順也」の問題は、既に論じた。

４難　呼は心と肺より出、吸は肝と腎によりて入り、呼吸の間に脾は穀味を受けると先ず述べる。そして、浮＝陽・沈＝陰、心肺「俱に浮」～心脈は「浮而大散」・肺脈は「浮而短濇」、肝腎「俱に沈」～肝脈は「牢而長」・腎脈は「按之濡　挙指来実」、脾者「中洲」で脈も「在中」、と言うように記述が続く。

第二段には、脈状を陽脈の脈状と陰脈の脈状とに分類し、脈状の陰と陽の混合したタイプを六種類示す。

此処で記述している「滑」は、明らかに 15 難の「石」脈を説明した「滑」とは異なっている。「石」脈の説明では「脈来上大下兌　濡滑如雀之啄」とされている、５難にあっては、「按之至骨　挙指来疾」とも述べている。これは「按之濡　挙指来実」の脈状を、今一つの表現で説明したものと解すべき性質のものであろう。

５難　脈拍部の深さによって五臓五行が診別出来ることを記述している。

各部には、４難や 15 難などに言う五臓の脈状が拍動していると解釈するのが相当である、と言うことができる。それは、「与皮毛相得者肺部也」「与血脈相得者心部也」「与肌肉相得者脾部也」「与筋平者肝部也」「按之至骨　挙指来疾者腎部也」と述べて、所謂『五体論』と脈象が切り離せないものと認識していることが示されているからである。従って、体組織のそれぞれの深さに拍動する脈拍と言うのは、軟部組織に脈管の拍動が伝播され

ている姿に他ならないことが認識されているのである。例えば、若し、「腎部」まで按圧した所に「洪」脈が診られた場合には、「腎部」に「火・熱」があることを示していると判断しなければならないことを教えているのである。つまり、五臓論的に病位を、また同時に五行病因論的に病因や病状を、診ることができると、教えているのである。これは、14 難・15 難に言う「平和」な脈状とはどう言うものであるかについての記述の伏線（4 難の記述に結び付いて）となっている（7 難の記述とともに）ものである。

6 難　脈による陰陽虚実の判断を述べる。

7 難　三陰三陽の脈状の記述を、季節（六甲子）の旺脈を記述して、15 難の「四季」の旺脈の記述と並んで、行なっている。『傷寒論』の「六経脈状」の記述と対照して考察する必要がある。

9 難　数脈＝腑・熱・諸陽、遅脈＝臓・寒・諸陰として、「臓腑の病」を別かち知ると記述する

１０難　議論の多い記述である。五邪を「五臓五腑の邪」とする『経釈』の説（何愛華も）、50 難の「虚邪・実邪・賊邪・微邪・正邪」とする説（加藤章・加藤宗博・張世賢・虞庶・）、49 難の「憂愁思慮―傷心・形寒冷飲―傷肺・恚怒気逆―傷肝・飲食労倦―傷脾・久座湿地強力入水―腎＝内傷五邪」や「中風・傷暑・飲食労倦・傷寒・中湿＝外感五邪」とする（徐霊胎『難経経釈』・名古屋玄医『難経註疏』・丁錦『古本難経闡註』・黄元御『難経懸解』・王洪図）『難経白話解』・南京中医学院『難経校釈』・唐湘清も）説、「五臓五腑之気失其正而為邪者也（滑寿）」という（名古屋玄医・南京中医学院『難経校釈』・葉霖・王洪図・烟建華・黄維三も）説（五臓間や五臓六腑の相互間が影響しあうものとする説も同系統）、「50 難の五邪は五臓六腑の病邪の属性」（王樹権）という説、「十雑＝甲と巳・戊と癸・丁と壬・丙と辛・乙と庚の相互関係の邪」とする丁徳用の説、などなどニュアンスの相違を問題にすれば、もっと区分しなければならない。何れの説を是とするかは大いに問題の所である。「剛柔」の理解についても丁徳用のものから、臓病・臓邪は剛、腑病・腑邪は柔とする説、陰病陰邪を剛と言うのは臓病が難治であり、陽病・陽邪は治しやすいから柔とするのだ、という説、陽邪が臓に行き、陰邪が腑に行くことがあるが『難経』は触れなかったのだと言う説などなどまで、議論の多い難である。

１１難　「人吸者随陰入　呼者因陽出」は 4 難の前段と全く同じ思想である。「50 動而 1 止　一臓無気」は「腎臓気先尽也」と言って、呼吸の欠滞の度合いと臓機能の状態が関連していることを言う。

１３難　脈状の意味する五臓と、面色や尺の皮膚の状態は、対応し合うものである点をのべる。続いて、五臓にはその状態を反映するもの、つまり、声色臭味〈液〉があり、それぞれにはそれを主っている臓がある（34、40、49、74、の諸難に記述）が、この難では、それらを「色」に代表させて、脈象の意味する所と「色」の意味するものとの関係に、着目することの重要性を指摘している。

これは１難の記述 16 難の記述と対応して、脈診の核心的な主題を論じている。両者の関係に、矛盾やずれがあるのが病であり、その矛盾が「相生関係」にあれば、治癒できるものである。しかし、「相剋関係」にあれば、「死」に向う転機を持っているものである。と言う事を主張している。

１４難　一段では、損脈（遅脈）と至脈（数脈）の程度・度合いの診断的な意味を「離経」「奪精」「死」「命絶」のように区別して、脈象による病状の段階を診別する。さらに、至脈（数脈）の病は下（腎臓）より上（のぼ）るものであり、損脈（遅脈）の場合は上（肺臓）より下（けだ）って行く病であると述べる。この病候の本質的な虚実観は、12 難の主張と繋っている。

第二段では、虚損の病の病証の基本的な点を圧縮して表現した上、「従上下者」は「骨痿不能起于床者死」、「従下上者」では「皮聚而毛落者死」と明らかにして「死期」の判断を記述し、続いて「治損之法」の根本（治則＝治療規則）の枢要点を示す。

第三段では、「脈来一呼再至一吸再至　不大不小日平」つまり‘呼吸数が正常で脈状に大小に変動し動揺すると言う不安定さが無い－これが平常＝健康な脈である’と先ず明らかにする。続いて、「適得病」「頭痛目弦」「胸満短気」「病欲甚」「苦煩満」「腹中痛」「滑者傷熱」「濇者中霧露」「当困」「夜加」「昼加」「雖困可治」「難治」「死脈」「夜死」「昼死」「人雖能行　猶当着床」「血気不足」「無魂者当死」「行尸」などのように、種々の脈状が示している病症を具体的に述べたり、病状判断を述べたりする。

第四段では、「上部有脈　下部無脈　其人当吐　不吐者死　上部無脈　下部有脈　雖困無能為害　所以然者　譬如人之有尺　樹之有根…脈有根本　人有元気…」と述べていて、４難・８難・12 難・58 難・当難第２段の記述に見事に対応させている。

１５難　一段では、四季の脈象は、五臓の脈象でもあることを記述する。

春―風―木―肝＝万物初生　未有枝葉～脈来＝濡弱而長　弦脈
夏―南―火―心＝万物所茂　垂枝布葉　皆下曲如鈎～脈来＝来疾去遅　鈎脈
秋―西―金―肺＝万物所終　草木華葉　皆秋而落　其枝独在　若毫毛
～脈来＝軽虚以浮　毛脈
冬―北―水―腎＝万物所蔵　水凝如石～脈来＝沈濡而滑　石脈

以上のように、脈象は自然の季節の状態を表象したものと把握している。

二段では、

A．「気来実強」が［大過の脈］で、それは「病在外」つまり外感の病であること、「気来虚微」は［不及の脈］で、それは「病在内」つまり内傷病であること、などを知ることが出来る。

B．弦・鈎・毛・石などの「四季の脈」は、「微」にそれぞれの季節の脈状を見せているのが、『平』つまり、問題が無く正常であることを示していて、そう言う状態は「胃の気」がある脈状である。従って、例えば「弦多胃気少日病」

であり「但弦無胃気曰死」のように、四季・五臓の脈状を診て「病」と「死」が診れることを記述する。

C.「大過」の脈については具体的なイメージで、次のように記述していて、脈状を理解しやすい。

弦―平＝気来厭厭聶聶　如循榆葉
病＝益実而滑　如循長竿
死＝急而勁益強　如新張弓弦

鈎―平＝脈来累々如環　如循琅玕
病＝来而益数　如鶏挙足
死＝前曲后居　如操帯鈎

毛―平＝其脈来藹藹如車蓋　按之益大
病＝不上不下　如循鶏羽
死＝按之蕭索　如風吹毛

石―平＝脈来上大下兌　濡滑如雀之啄
病＝啄啄連属　其中微曲
死＝来如解索　去如弾石

この難の記述では「不及脈」の場合には「気来虚微」と記述しているのみであるが、記述されている具体的な脈状は「不及の脈」に相当していないことは一目諒然である。

前にも論じたが、筆者の疾病論が浮び上がって来る記述である。

D. 脾胃の脈については、長夏の脈とともに『難経』の記述は極めて乏しいが、この難の終段には、独の記述で、これの重要な意味を述べている。

16 難…
17 難…
18 難…
19 難…
20 難…
21 難…
37 難…
46 難…
48 難…
49 難…
58 難…
81 難…

◎病脈論の難…病であると知ることができる脈状に関する記述…

未完